

おらほの記憶

震災後の風景をたどるようになって、二年以上が経過した。津波で押し流された地域は三年目の春を迎えている。山のようにあつた瓦礫は、その多くが撤去されて、かつて町のあつた場所には青々とした草が茂っている。だが福島県の浜通りには、放射能汚染のために立ち入り禁止となっている区域が残り、そこではあたかも時間が凍結したかのごとく、「復興」の言葉はほとんど現実感を伴わない。少なくともこうした現状を目の当たりにすると、東日本大震災に関しては、まだ「震災後」を口にするのは早すぎるといえるのが実感だ。

一昨年から福島県立博物館なども連携しながら、地元の方々とともにこの地域の風景についていくつかのイベントや対話の機会をもっている。そのなかで、最近では石碑がひとつのテーマとなってきた。海から数キロの田園地帯は、かつて入り江だったところを干拓して出来たものだが、その干拓事業が完遂するたびに、記念碑を立てている。これを辿ると、どこまでが海だったのかが分かる。石碑は、自然の地形を改変した人間の行いを記憶しているのである。

現代美術家の岡部昌生さんが南相馬市博物館で開催した個展に合わせ、この春ワークショップを企画した。その際にメインイメージとなったのが「おらほの碑」だった。これは南相馬市の鹿島区にある八坂神社に昨年の暮れに、倒壊した瑞垣の修復の記念と災害復興祈願を目的に建てられた石碑なのだが、見た目はどこにでもあるように、実にユニークな碑なのである。碑文は次のように始まる。

港千尋

プロフィール
1960年神奈川県生まれ。写真家、映像人類学者。多摩美術大学教授、芸術人類学研究所研究員。写真展「市民の色」で2006年伊奈信男賞受賞。2007年第52回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展で日本館の展示企画コミッションナーに就任。おもな著書に「記憶——創造」と「想起の力」（講談社、1996年。サントリイ学芸賞）、「レイヴィス・ロスターの庭」（NTT出版、2008年）、「第三の眼」（せりか書房、2009年）など。

「去年の三月十一日だ。こじはんのちんとめえだつたべ。なんだもね、天地ひっくりけるぐれえの揺れでな、お宮の瑞垣もぼちよこつちえな、ほのあとには、海、こつちやおほせて来てえ、お宮のずき下さまでゴミだのがいつべよさつた。」

そう、これはこの土地の言葉で記された、震災の記憶なのである。「おらほの碑」つまり「わたしたちの碑」は、その土地と結びついた言葉遣いを通して伝える、そこが肝心なのである。

「今もくらしはてえへんだけんちよも、ご先祖様ずっと守って来てくつちやお社だべした。おれらは、子つこ、孫つこさもちゃんと伝えねつかなんねと思ふんだから、みんなしておまつりできんのはよがつべ。おてんのはんも喜んでくれつべな。」

ご先祖様が見ていた風景を守るため、起きたことを伝えてゆくために、力を合わせて知恵を絞らなければならぬと、おらほの碑は教えている。

月刊 みんなぱく

6月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
おらほの記憶
港 千尋</p> <p>2 特集
食べない食べもの、
食べられない食べもの</p> <p>3 神聖なる牛がアツラーのもとへ 南出 和余</p> <p>4 カニやカエルはハラールか
——ふたつの世界に生きるもの 阿良田 麻里子</p> <p>6 クワズイモはふたつの顔をもつ 渋谷 綾子</p> <p>7 肉食礼賛の中東で、
ベジタリアンとして調査する 菅瀬 晶子</p> <p>8 食品サンプルの技を体験 山中 由里子</p> <p>9 残された柿の実 関口 涼子</p> <p>10 似たモノさがし
展示場の食べもの
庄司 博史</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
南半球で創られる中国イメージ
——オーストラリア華人歴史博物館
河合 洋尚</p> <p>16 多文化をあきなう
市民力がアジアと日本をつなぐ
賛川 恭子</p> <p>18 フィールドで考える
舞台で学べ
——仮面舞踊修行の日々
吉田 ゆか子</p> <p>20 人間学のキーワード
インフォーマルセクター
小川 さやか</p> <p>21 追悼
岩田慶治 民博名誉教授を偲ぶ
片倉もとこ 民博名誉教授を偲ぶ
編集部 榎永 真佐夫、山中 由里子</p> <p>22 制服の世界、世界の制服
非常時の制服
木村 周平</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|